古今和歌集二七番
「浅緑糸よりかけて」の歌の解釈

阿満　誠一

（一九九五年五月一〇日受理）

一　はじめに

西大寺のほとりの柳をよめる　　僧正遍昭

浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

古今和歌集二七番の右の歌は古来さまざまな注釈書に取り上げられてきたが、いまだに解釈が定まっていない部分がある。その一つは「糸よりかけて」を、「糸を撚って懸けて」と解釈するか「糸を撚って（撚り合わせて）」と解釈するかの違いである。「よりかけて」を二語と見るか一語と見るかの違いと言い換えてもよい。また、詞書に注目して、一首を数珠の見立てと取る説、巨大な人工美（西大寺）と自然の小さな営みの対照を読み取る説があるし、はやくは契沖のように、寺のほとりで白露を玉のように見せるのは「いつはり」であるということを示すための詞書と見る立場もある。

加えて、諸注が十分な注意を払い得ていないと思われる事柄もある。それは本来秋のものである「白露」が春の歌の中に存在することの意味をどう考えるかである。また「浅緑糸よりかけて」を「浅緑」（色）の「糸」を「よりかけて」として「浅緑」と「糸」の間に助詞「の」を介在させて一・二句を解釈することへの疑問もなしとしない。

紀貫之は仮名序において「蓮葉の」の歌および「名にめでて」の歌とともに一首を例に掲げる形で「遍昭は歌の様は得たれども、誠少なし。たとへば、絵に描ける女を見て、徒らに心を動かすがごとし。」と評している。「糸」が「柳」の枝の、「玉」が「白露」の見立てであることから推察するに、貫之の評語は一首が見立てによるものであることに言及したという側面を有していると考えてよかろう。いいかえれば撰者によって見立ての歌と見定められたということである。

本稿では、一首が徹底した見立ての歌であることを踏まえつつ、春の歌に「白露」なる語が存在する事実を手がかりとして、右に掲げたいくつかの問題について考察する。

二　「白露」について

まず、「白露」が古今集においてどのように現われるかをみておく。

イ　いとはやもなきぬる雁か白露のいろどる木々ももみぢあへなく

に　（秋歌上）

ロ　おりて見ば落ちぞしぬべき秋はぎの枝もたわゝにをける白露　（秋歌上）

ハ　秋の野にをくしらつゆは珠なれやつらぬきかくる蜘蛛のいとすぢ　（秋歌上）

ニ　白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをちゞに染む覧　（秋歌下）

ホ　しらつゆも時雨もいたくもる山は下ばのこらず色づきにけり　（秋歌下）

すべて秋の歌である。「白露」を「珠」と見るハの発想は二七番と同一のものであるが、特徴的なのはイ・ニ・ホにうかがえる発想法である。いずれにおいても「白露」は木の葉を紅葉させるものとして現われる。我々はそこに当時の歌人たちの共通認識を読み取ることが可能である。

ところで、はたして「白露」は春の歌に現われるのだろうか。二七番の歌を除いて「古今集」では春の歌の中には現われない。以下、検索の範囲を「後撰集」以下の八代集に広げても「千載集」まで現われない。「新古今集」に一首のみ「青柳の糸に玉ぬく白露のしらずいくよの春かへぬらん（春歌上）」とあるが、上二句は遍昭歌をふまえたものと見るべく、作者の独創になるものとは言いがたい。これらのことから、春の歌に「白露」が出現するのはきわめて異例のことだったと言うことができよう。言い換えれば、作者遍昭にとって「白露」は一首において必要不可欠な語であったということである。では遍昭はなぜ春の歌の中に「白露」なる語を入れたのか。そして「白露」は秋のものという常識的な感覚から逸脱した歌を撰者達はなぜ古今集に入集させたのか。「白露」の存在にはなんらかの積極的な意義が認められねばならない。

言うまでもなく、一首において「春の柳」は擬人化されている。その「春の柳」が「浅緑糸よりか」けるとともに「白露を玉にも」貫くというのであるから、一首の構造は次のようになる。

浅緑糸よりかくる（けて）
白露を玉にもぬける
└─春の柳か

こうやって見ると「春の柳」を修飾する二つの句の冒頭がいずれも色彩を表す語であることが明瞭になる。「浅緑」と「白」はいわば同等の格をもって並列されている。そこから、作者遍昭がねらいとしたものの一つとして、芽吹いて間もない柳葉の淡い緑色と露の白との取り合せの美しさを読み取ることが可能である。もしそうでなければ、あえて「白露」を持ち出すまでもなく「朝露」と表現して音数律上の不都合を防ぐことは可能だったはずである。そして、撰者が遍昭のねらいを読み取り受けとめたからこそ古今集に収められたと考えるべきであろう。作者にとっても撰者にとっても置換不可能な「白露」であった。

三　詞書について

契沖は詞書について、

こと書にたゝ柳をみてよめるとかきてもさてあるへきに、西大寺のほとりの柳といへるにつきておもふに、柳か枝もまことの糸な

らす、白露も誠の玉ならぬに、なとかくいつはりなかるへき寺のほとりに、玉の緒をぬきて人をあさむくそとよめる心をあらはさんとて、こと書をくはしくかけるにや。夏の哥に蓮をよまれたる哥の心おもひあはすへし①

として、誠と偽りの対立を際立たせるものとして詞書が存在し、枝を糸のごとく見せ、白露をあたかも玉であるかのように見せる柳を非難した歌だと受け止めている。

これに対して本居宣長は一首を、

アレアノ柳ヲ見レバ　ウスモエギ色ノ絲ヲヨツテカケテ　キレイナ白イ露ヲマア　玉ニシテツナイデ　サテモ〳〵見事ナ春ノ柳カナ②

と俗語訳した後に「餘材わろし」と続けて、契沖の説を否定する。否定の根拠は示されていないが、「キレイナ」という語を補って解釈し、一首における柳の状態を「見事ナ」ととらえている事実は、宣長が、一首の主想が美にあるととらえていることを物語るし、美という観点をないがしろにして、誠と偽りと言う観点からのみとらえる契沖の態度を批判したものと見ることができる。もちろん一般的に言って、「人をあさむくそ」となじることは必ずしも批判と同じではなく、「春の柳」が見せている様子に対する感動なしい愛着の逆説的表現である可能性はあるが、契沖説の中に春の柳に対する感動あるいは愛着の念を表す言葉が存在しない事実から見て、宣長の批判は契沖説の正確な読み取りのもとになされていると見るべきである。しかし、だからと言って詞書にいわば「こだわった」契沖の姿勢そのものまで否定し去られるものではない。詞書が現に存在している以上、詞書も含めて一首を享受しようという態度は尊重されねばならない。問題はその享受の仕方にあるのではないか。

近代に至っても、詞書を含めて一首を享受しようという試みは続けられている。

奥村恒哉氏は「大陸風に構築された大伽藍を背景にしての、自然の小さな営み。巨大な人工美と対照してこの歌は生きる。③」として人工美と自然美、巨大なものと小さなものとの「対照」を読み取る立場に立っておられる。また小松英雄氏は「古今集」において「詞書と和歌とが融合している例④」の一つとして一首を掲げ、「和歌だけを読むと、柳が浅緑色の細くて長い糸を縒って垂らし、露の玉を貫くという内容である。しかし、詞書に『西の大寺のほとりの柳』とあるから、白露を珠として貫いてそこに懸けてある柳の糸は、長い数珠に見立てられている。厳密にいうなら、その両端を結べば数珠になる。」として、一首の手法として用いられている見立てを徹底させることによって、柳が「数珠」に見立てられているとの説を展開しておられる。

ここで詞書に関する契沖のもう一つの疑問に触れておきたい。それは

西大寺のほとりには柳を並木なとに植られたるか遍昭の比まてありけるを見てよまれけるにや⑤

という一節である。角川日本地名大辞典26「京都府（下巻）」によれば、東寺の対となる西寺は大同三年以降工事が始まり、その後金堂の造営、講堂の落慶法養、塔の竣工と続いたが、一方では落雷・焼亡の災難に遭い、寺運は次第に衰えたと言う。また同書は『山城名勝志』（宝永二年

序・正徳元年刊）巻七の「今旧跡、東寺西三町許ニアリ。金堂ノ跡ハ僅ニ田間ニ残ル。松尾祭ノ日、神供ヲ備ル所也。又、講堂、塔ノ本等、田畠ノ名トナル。」という記述を引用して、江戸時代に入っての同寺跡が田畑になってしまっている事実を紹介している。西大寺そのもの、そして柳並木も失われていた江戸期の契沖が、一首は遍昭が西大寺および柳並木を実際に目にしての詠だとの思い込みを抱いているからこそかかる疑問が生ずるのであろう。詞書が作者遍昭の手になるものであるとの前提が生んだ疑問である。もちろん、その前提が誤りだとは言わないが、撰者の手になった可能性もあるのである。[6] いずれにしても詞書は厳然としてそこに「ある」。であれば、我々はまず享受する側の者として詞書が存在する意味を考察することから始めよう。考察に際しての基本的な姿勢として、詞書は歌を生かすものとして存在するという姿勢をとる。小松英雄氏の「詞書と和歌とが融合している」という見方を尊重したい。また奥村恒哉氏が用いられた「背景」という語を考察の手がかりとする。一首は美的な感動を詠んだものとする宣長の受け取り方は考察の基本的な方向を示してくれるだろう。

すでに二で見たことであるが、一首のねらいのひとつとして柳の淡い緑色と露の白との取り合わせの美しさがあった。その見方を押し進めていけば「西大寺」も色の取り合わせにあずかっていると考えることはできないか。現代に生きる我々が目にする寺は古色蒼然としたそれであることが多いが、ほんらい寺の柱や梁が鮮やかな朱色をしていたことは、再建なった寺を訪れてみれば明らかなことである。つまり「西大寺」は白露を玉のようにして貫いた薄緑色の柳の並木の朱色の背景として一首と関わり、一首のねらいにあずかっているのである。もし詞書が作者の手になるものであれば、遍昭は一首を色彩の取り合せの妙を一貫して造形しようとしたと言えるし、撰者の手になるとすれば、一首は柳並木のある、もしくはあった西大寺を背景にするのが最もふさわしいと判断されたということになる。

四　「糸よりかけて」の解釈

第二句「糸よりかけて」は宣長が「絲ヲヨツテカケテ」と解釈し、これに対して香川景樹が「かけて」に意味を認めないとした[7]対立、言い換えれば「糸を撚り合わせて、そしてその糸を柳の枝に懸けて」と解するか「糸を撚り合わせて」とするかの解釈の相違が現在も存している。[8]「よりかけて」と類似した表現に「よりあはす」がある。たとえば、

青柳の花田の糸をよりあはせて絶えずも鳴くか鶯の声
（拾遺集・春）

このように「よりかく」「よりあはす」という、形を異にする二つの語が存在する以上、「よりあはす」と区別して「よりかく」に「撚って懸ける」という意味を求めようとするのは事の成り行きとして自然であろう。しかし、一首における「よりかく」を「撚って懸けて」と解釈することには疑問がある。糸の強度を高めるために複数の糸を撚り合わせたら、次の行為はそれを柳の枝に懸けることではなくて、玉に糸を通す（玉を貫く）ことではないのかという疑問である。「撚る→懸ける→貫く」という順序には不自然さが伴う。

「古今集」二六番の歌は、

青柳のいとよりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける

という歌である。春の柳が若葉を出し、加えて桜も咲き始めた、いわば柳桜をこきまぜた美しい春の状態を喜び讃える歌であるが、言葉の遊びが隠されていることは言うまでもない。つまりここでは糸は衣の綻びを縫うものとして提出されており、その糸を「よりかくる」ちょうどその折も折、桜がほころびるというのである。したがってここには糸を「懸ける」必然性など出てこない。

それに関連して、この歌についての『古今集遠鏡』の記述を見ておきたい。

○糸ヲヨーツテハホコロビモヌフ事ヂヤニ　青イ柳ノ絲ヲヨリカケル春ノコロハ　ケーツクサ（しもぞ）　花ガ咲ミダレテホコロビルワイ

ほころぶるは、花のひらくをいふ、

同書の序文によれば、傍線部は、歌中に存在しないが理解を扶けるために本居宣長が補った解釈であるという。つまり彼は一首における言葉の遊びを「よりあわせる」と「ほころびる」の取り合わせに見て取っているのである。そのことと、二七番の歌の「よりかけて」を「ヨツテカケテ」と俗語訳し二六番の歌の「よりかくる」を「ヨリカケル」と俗語訳して両者を区別している事実は興味ふかいものがあるが、これだけでは「ヨリカケル」すなわち「よりあわせる」であると宣長が判断しているとは断言できない。今は撚るとほころぶとが対としてとらえられるのだと言うことだけ再確認しておけばすむ。

「古今集」ではまた次のようにも「よりかけて」が現われる。

片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ

（恋一）

片糸と片糸を交互に「よりかけて」それらが「合」わなかったら何をもって玉を貫く紐にしましょうか、というのが表の意味であるが、もちろん恋の歌であるから、第三句までは「あはずは」を導きだす序詞として働き、あなたに会わないならどうやって生きていきましょうか、というのが主想ということになる。一首において「よりかけて」の直後にいみじくも「あはずは」とあることは「よりかくる」という動詞は片糸と片糸を合わせること、すなわち撚り合わせるの意味であることを物語っている。ここにも「懸ける」という行為の出現する余地はない。

念のためにもう一例見ておく。

家に、行平朝臣まうで来たりけるに、月のおもしろかりけるに、酒らなどたうべて、まかりたゝむとしけるほどに　河原左大臣

照る月をまさ木の綱に撚りかけてあかず別るゝ人をつながん

（後撰集・雑一）

わかりにくい歌であるが、いま手元にある注釈書をひもとくと、一つの注釈書[9]は「照る月をまさきの葛の綱に結び懸けて、まだ飽き足りないうちに別れようとする人を繋ぎとめたい。」と解釈した上で「月が沈まねば、人も帰るとは言はぬだろうとの理」と歌の心を注記している。別の注釈書[10]は、解釈を「今照り輝いている月を柾の蔓で作った綱で撚ってかけて、まだ別れたくないのに別れて行こうとする人を繋ぎ留めたいもの

ですよ。」と解釈した上で、「まさ木の綱に…」の注記として「はっきりしないが、蔓征の古名という『まさきのかづら』で作った強い綱を撚ってあなたにかけて…の意であろう。」と記している。

いずれにしても客を帰したくないという作者の気持ちが詠まれていることは疑いのないことであるが、詞書から判断するに、客が帰ろうとする理由を月が沈むことに求めるのは無理であろう。むしろ、月がすばらしいにもかかわらず帰ろうとする客に対するうらみがましい思いが読み取れる。とすれば「まさ木の綱によりかけ」る何かは月そのものではなく月の光ととらえるべきではなかろうか。月の光を「まさ木の綱」に撚り合わせてその綱であなたをつないでおきたいと言うのである。撚り合わされた二つのうち、「まさ木の綱」は物理的に客を拘束するものであり、月の光は心理的に――こんなにすばらしい月を十分に賞でないで帰ってしまうなんて、なんて不粋なお方なんでしょうという意味で――拘束するものである。

これらのことから、「よりかけて」は「撚りをかける」「撚り合わせる」と解釈すべきだという結論が導き出される。柳の枝が垂れていることが「懸ける」という解釈を生む原因になったのだろう。

五　「浅緑糸よりかけて」の解釈

「糸よりかけて」の解釈がどうあるべきかについては今見たとおりだが、それと関連して「浅緑糸よりかけて」の解釈についても検討しておきたい。

再度『古今集遠鏡』に登場してもらう。

青柳の絲よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

○絲ヲヨリツテハホコロビモヌフ事ヂヤニ　青イ柳ノ絲ヲヨリカケル春ノコロハ　ケーツクサ（しもぞ）　花ガ咲ミダレテホコロビルワイ

ほころぶるは、花のひらくをいふ、

宣長は「青柳の絲よりかくる」を「青イ柳ノ絲ヲヨリカケル」と解釈し、一方「花のほころびにける」を「花ガ咲ミダレテホコロビルワイ」と解釈している。「青柳の」の助詞「の」を連体格と見、「花の」の「の」を主格とみていることは、俗語訳で「青イ柳ノ絲」「花ガ咲ミダレテ」と訳し分けられていることから明らかである。しかしこれは現在すでに明らかにされているように、いずれの「の」も主格で「青柳」が「絲よりかくる」現象と「花」が「ほころび」る現象との二つが対になった歌である。「青柳の絲」を「青イ柳ノ絲」と受け取ったいわば彼の勘違いが直後の二七番の「浅緑糸よりかけて」の始めの部分を「ウスモエギ色ノ絲」と解釈させたのではないかと推測される。「糸」の前にある、色彩を表す言葉が「糸」を修飾する語として同じ働きを有すると思い込まれたのではないかということである。

しかし彼の思い違いが明らかになった現在においても「浅緑糸よりかけて」の始めの部分は宣長の時代同様、「浅緑色の糸」として解釈され続けている。

ここで『古今餘材抄』の「柳かはかなゝり」という注意、あるいは『古今和歌集打聴』[11]の「緑のいとをよりかけて白露を玉になしつゝ貫きたる柳哉と云也」という解説を持ち出すまでもなく、「春の柳か」の「か」はほかならぬ「春の柳」に対する感動を表す役割を担った助詞である。も

し「浅緑糸よりかけて」が「浅緑（薄緑）色の糸をよりあわせて」というのであれば、柳の枝は浅緑色のものとしてすでにそこに存在していることになる。それでもそういう柳を発見した驚きは伝わるだろう。しかし「春の柳か」とはほかならぬ厳しい冬を越してきた柳に対する感動である。「春の柳か」という感動の表現がより生かされる解釈はないものか。

一首が見立ての手法に基づく歌であることはすでに触れたが、もうひとつ指摘しておきたいことは、現在言うところの擬人法が用いられているという事実である。「春の柳」が「糸よりかけ」るという表現しかり、「白露を玉にもぬける」との言説しかり。

「春の柳か」をより生かそうとの目論みのもと、この擬人法の手法を徹底させた解釈を試みるなら「浅緑糸よりかけて」には「浅緑色に糸を撚り合わせて」「浅緑色に糸に撚りをかけて」という新たな解釈の可能性が浮上する。既に浅緑色のそれとして柳の枝があったのではなく柳自身が意志をもって浅緑色にした（染めた）のである。「春の柳か」とは枝が浅緑色である春の柳の状態に対する感動ではなく、浅緑色に糸を撚ってみせた柳の行為に対する感動なのである。

「浅緑」と「糸」との間の助詞の不在が「浅緑色の糸」という解釈を生んだのであろうし、色を表す言葉の後に名詞が来れば、前者は後者を修飾すると判断するのは自然であろう。しかし次に掲げるいくつかの歌の冒頭にある「浅緑」とそれに続く名詞は果たして修飾・被修飾の関係にあるだろうか。

イ　浅緑野辺の霞は包めどもこぼれてにほふ花桜哉　（拾遺・春）

ロ　浅緑のべの霞のたなびくにけふの小松をまかせつるかな　（後拾遺・春上）

ハ　あさみどり花もひとつに霞みつゝおぼろに見ゆる春の夜の月　（新古今・春上）

「浅緑」が「霞」とともに現われる例しか示し得なかったが、いずれも「浅緑」が直後の名詞を修飾しているとはみなし得ない、あるいはみなし難い歌である。

まずハについて見る。花は言うまでもなく桜でありその花の色そのものは「浅緑」では有り得ないから「浅緑」と「花」は修飾・被修飾の関係にはない。これは春の夜の霞と桜とがひとつに溶け合っている様、すなわち「あさみどり」色に霞んでいる状態だと見なければならない。イは一見「浅緑」と「野辺」とが修飾・被修飾の関係にあるかのように見える。つまり、浅緑色の野辺、その野辺の霞が桜を包み隠そうとしても云々ととる取り方であるが、それでは霞の色が明瞭でなくなる。イは霞がかかって桜を隠そうとするが桜はそれに負けずに美しい色を見せて咲き誇っているという歌であり、そのとき霞は野辺の新緑と溶け合って浅緑色になっている。桜の花びらの色がその浅緑色に負けないのである。ロにおいても野辺の霞が浅緑色にたなびくと見るべきである。

以上、一首で用いられている擬人法の手法を徹底させて見ることと、「浅緑」と直後の名詞との直結が必ずしも両者が修飾被修飾の関係にはないことを見ることによって、現在問題にしている「浅緑糸よりかけて」が「浅緑色に糸を撚り合わせて」と解釈できることを示した。

六　おわりに

「はじめに」で掲げた問題点についてどれだけ明らかにしえたかはなはだ心もとないが、実は、本稿を成すにいたったきっかけは宣長の『古今集遠鏡』にある。同書をひもといて早速とまどいを覚えたのが引用として示した箇所のうち「よりかけて」を「ヨッテカケテ」と解釈した部分であった。「ヨッテカケテ」それから「玉ニシテツナイデ」という順序が腑に墜ちなかった。もし懸けるなら糸を「ヨッテ」「玉ニシテツナイデ」それからのことではないのかと感じたのがことの始まりである。疑問を解くべく諸注釈書にあたったが疑問は氷解するどころか、それ以外にもあれこれ続出するという有様だった。それらの疑問については二から四で触れたとおりである。ただ、考察のきっかけを与えてくれた本居宣長の次のような主張について一言述べて終わりとしたい。

和歌ノ道ニヲキテ、第一ニ古ノ風體ヲミ、ヨキ歌ノサマヲマナフニ、此古今集ヲ以テ規矩トスル事、末代迄カハル事ナシ

（『排蘆小船』⑫）

若年期のものではあるが、歌学びのお手本として「古今集」を推奨する言葉である。彼が「古今集」をどのように受容してかかる言葉を記したのか今は詳らかにし得ないものの、これまで見て来たことから明らかなことは我々が古今集の歌を受容したのと同じように宣長も受容したという保証はないということであり、当たり前のことだが、そういう認識のもと、彼の推奨の言葉を読まねばならないということである。「古今集」二六番・二七番の歌にとどまらず、他の歌を宣長がどう解釈・享受したか今後の課題としなければなるまい。思えば「古今集」の時代と宣長の時代との間には数百年の隔たりが厳然として横たわっている。そして、「古今集」と我々の時代とには千年を超える時間の隔たりがある。ということは「古今集」時代の人々が「古今集」歌を受容したようには受容できなくなっている可能性が大である点では宣長も我々も同じであり、むしろ我々のほうが宣長より不利な立場にある。当時の歌人達の感性を復元するためには、可能な限り、一つ一つの語の当時における生きた用法に即して歌に接することが求められようし、また、詠まれた時代に近接する世の注釈書を参考にする必要があるが、後者については今回は触れることができなかった。

注

① 『古今餘材抄』（契沖全集第八巻・岩波書店）
② 『古今集遠鏡』（本居宣長全集第三巻・筑摩書房）
③ 新潮日本古典集成「古今和歌集」（新潮社・昭和五三年）
④ 「やまとうた」（講談社・平成六年）
⑤ ①に同じ
⑥ 岡村和江氏「古今集の詞書及び左注の文章について」（国語と国文学・昭和三九年一〇月号、後に日本古典文学研究資料叢書所収）参照
⑦ 景樹は『古今和歌集正義』において二六番「青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける」の注において「いとよりかくるは只よるといふ事にてかくるにこゝろはなき也」とした上で二七番の歌の注で「よりかけては只よりかくといふにかはらさる事上にいへり」としている。
⑧ 詳しくは小町谷照彦氏「名篇の新しい評釈・古今和歌集評釈・二十（國文學解釈と教材の研究第二九巻十号・昭和五九年八月）」参照。

⑨ 工藤重矩氏「後撰和歌集」（和泉古典叢書3）
⑩ 新日本古典文学大系「後撰和歌集」（岩波書店）
⑪ 賀茂真淵全集第九巻（續群書類從完成會）
⑫ 本居宣長全集第二巻（筑摩書房）